

# 台湾建国科技大学春季中国語研修引率記

## Komatsu University 2020 Four-Week Intensive Chinese Study Tour to Chienkuo Technology University, Taiwan

岩 田 礼

公立小松大学

### 0. はじめに

小稿は2020年2月15日～3月14日に台湾・建国科技大学で実施された海外語学研修の概要である。

国際文化交流学部は、海外語学研修（4単位）、異文化体験実習（4単位）、地域実習（2単位）、インターンシップ（2単位）を選択必修とし、4単位以上取得を卒業要件としている。2019年度～2020年度は、この制度の初の適用期間であり、対象学年（現3年次生）の約50名が海外研修・実習への参加を希望した。ところがコロナ禍により、中国・常州大学、マレーシア・ラーマン大学、米国・ウェスタンワシントン州立大学等への派遣が中止となり、約半数の希望者が海外への道を閉ざされた。実施できたのは台湾・建国科技大学（19名）、ニュージーランド・オークランド大学（6名）の2プログラムだけだった。しかし、他大学の状況を見るとこれでも僥倖のうちと言える。研修半ばで中止、帰国という例も聞いた。実際、建国科技大学での研修もそのようなピンチに一度ならず陥った。29日間の研修を文字通り完遂できたのは、日台双方の関係者の強い意志と寛容、そしてそれを理解し、耐え抜いた19名の学生（全員女子）の勤勉の賜物である。筆者の引率経験では、平時であっても一人や二人の病人が出るのは避け難い。感染防止のための緊張を強いられた一か月間、一人も病院にかかる学生が出なかったことは特筆すべきであろう。また、常に陣頭指揮に当たられた応用外国語系の林麗華先生はじめとする建国科技大のスタッフのサポート、心遣いは成功の基本条件だった。

### 1. 研修内容

本研修は「海外語学研修」としては異例で、「文化体験実習」の性格を兼ね備えた。それは、観光学科を有する建国科技大の特色、ホスピタリティ精神の顕現である。

(1) 期間中の学習・実習時間は100時間。通常午前中に行われる中国語の授業が60時間、午後

に行われる料理、書道等、様々な文化体験実習の総計が40時間であった。このほか、現地学生との交流会、発表会が行われた。

- (2) 台湾の大学ではどこでもバディと呼ばれる生活サポートのための学生が割り当てられる。一般には数名につき一人だが、建国科技大では小松の学生とほぼ同数の学生が、食事、買い物、小旅行、さらに授業に至るまで、四六時中付き添っていた。彼らの多くは日本語が話せた。
- (3) 週末には、近郊への小旅行、台南への旅行などが組まれたほか、最後の二日間は、台北地区へのバス旅行があり、学生達は九份などの名所旧跡を訪問することができた。

上記(2)について補足する。バディのサポートはすでに到着当日の歓迎から始まった。建国科技大は、台湾中西部の彰化市にある。台北国際空港からは、まず新幹線の桃園駅に行き、台中駅まで乗った後に、彰化市に移動する。しかし、小松発のEva航空便の台北到着は夜10時頃であり、入国手続き等を終わると11時近くになってしまう。そのため、その夜は空港近くのホテルに一泊した。

翌日、我々は新幹線で台中まで行き、昼食を取りながら林麗華先生の出迎えを待った。すると驚いたことに、林先生だけでなく、男子中心の学生集団が現れて我々を迎えてくれた。彼らとともにバスに乘車、そのまま大学に向かうと思いきや、まず公園散策、次にランタンフェスティバル見学、夕食は台中に戻って取ったため、大学にはやっと夜の10時頃に到着した。このような厚遇と学生交流が最終日まで続いた。筆者は林先生に何度か小松の学生だけで行動する時間を作ってほしいと頼んでみたが、基本は変わらなかったようである。



## 2. COVID-19の影響

小松空港を発った2月15日は、武漢を起点とするコロナウイルスが日本にも侵入し、日本に寄港したダイヤモンドプリンセス号の状況が刻々世界に向けて発信されていた頃である。ところが、当時、日本の空港では検温もされず、マスク着用を呼び掛けるアナウンスすらなかった。片や台湾は封じ込めにほぼ成功していた。マスク着用はほとんど義務であり、大学でも全員に対して朝夕の検温が義務化されていた。本研修参加者はこのような彼我の意識の差異を肌身で体験することになるのだが、受け入れ側の建国科技大にとって19名というdelegationは相当の重圧だったろう。そもそも、台湾の大学では新学期開始が2週間延期されていたので、本学学生の受け入れは例外的な優遇措置と言えた。2月17日以降の2週間、大学内で行われた唯一の授業であり、学生食堂や購買も閉店中で、キャンパスは閑散としていた。

学生の滞在期間中、航空各社は定期便を次々と減らしていった。小松直行便は全便欠航となり、帰国便は関西国際空港に変更になった。しかも変更は二度に及んだ。半年前に購入した超安値（37,000円）のEva航空チケットは、本来キャンセルも変更も不可だった。二度の変更が無料で可能となったのは、「小松の子供達のために」と言って尽力してくれた仲介者のお蔭だった。一般の旅行会社ならどうなったかわからない。

### 3. 事前準備と事前研修

話が前後するが、建国科技大学とは、小松短大時代からの交流実績がある。筆者も設置準備の頃に当時副学長だった江金山現学長が林先生を伴って訪問された折、当時設置準備委員長だった長野勇短大学長とともにお会いし、四大移行後の交流について話し合った。

公立小松大学開学後の2018年9月、新たに協定を結び直す交渉のため木村誠准教授とともに台湾に出かけた。この時、短期研修に関する交渉はやや難航したが、最後に授業料、宿舍費併せて約30,000円という破格のご提示をいただいて妥結した。宿泊施設がなかなか決まらなかったため、その後も他の出張の帰路に建国科技大学を二度訪問した。

研修参加者の募集は、2019年夏休みの前から開始し、参加者が確定した8月下旬には、上記Eva航空の往復チケットを購入した。後期始業後に第一回の事前研修を実施し、その後出発までに三回実施した。また、大学主催の海外旅行保険、危機対応保険の説明会にも参加させた。

危機対応の一つの鍵は、学生間及び教員・学生間で円滑な意思疎通が取れる体制と信頼関係を築くことである。そのため、まず全体のリーダーと補佐役を決め、次に19名を4名ないし5名からなる4つの班に分けて、それぞれ班長を決めた。リーダーと班長は、引率教員が帰国した後、一週間に一度メールによる報告を義務付けた。このほか、LINEグループを作って、日常的な連絡を取り合った。建国の学生グループも、小松の班編成に対応したグループ割りをしてくれた。この体制は最初から最後まで十全に機能した。

### 4. 事後研修

3月14日、19人の学生たちは無事に関西国際空港に降り立った。ご家族がはるばる出迎えにいられた学生もいたが、大半は鉄道で当日中に自宅に帰着した。

帰国後の4月1日に事後研修を一度実施し、感想と反省点を述べ合った。本研修に対する評価は、小稿で述べた点に尽きていると思う。

本学の海外語学研修は、帰国後に達成度測定のための外部試験を課している。但し、合格は単位認定の条件ではない。今回は中国語検定（“中検”）3級、漢語水平考試験（HSK）4級のいずれかを自費で受験することとした。この2つの試験のレベルはほぼ相同と予想したが、結果は下記の通りで、中検の方が難しかったようである。

- 中検3級受験者13名、うち合格者2名

- HSK4 級受験者 6 名、うち合格者 5 名

**[参考] 旅行費用**

下記は引率者が管轄した費用（1NT=3.7 円で算出）。合計すると、約 8 万円である。

- 航空券 Eva 空港 小松⇄台北 37,000 円
- 授業料、宿泊費、ツアーバス代等 35,000 円
- 到着日ホテル代（一人平均） 4,200 円
- 帰国前日ホテル代 2,000 円
- 台湾新幹線、タクシー代等 2,000 円

リーダーと班長から得た情報では、他に食費・おやつ・日用品（平均 4 万～5 万程度）、建国へのお土産、交通費（台湾国内及び関空からの JR）等で、総額 12 万～15 万程度。航空券は先払いなので、台湾で必要だった現金は平均 10 万円程度となる（+日本への土産）。